

早春の土手

山中利子

詩集 早春の土手

定価 1000円

1979年 5月1日 印刷 野火叢書 67
1979年 5月10日 発行

著 者 山 中 利 子
発行者 高 田 敏 子
発行所 野 火 の 会
東京都新宿区高田馬場 1-8-7

印刷・製本／北伸印刷

詩集

早春の土手

山中利子

詩集
早春の土手



挿
画・
渡
ま
ゆ

はじめに

高田敏子

山中利子さんの詩は、大変たのしいのです。

感覚的なとらえ方、自由な発想、日常の中にも詩の世界がたくさんあることを教えて下さいます。

はじめに置かれた「小さな街」は、齒科医院の門口で見かけた少女の様子を伝えて、最後に「通りすぎてから 蝶のように思えてきた」といわれています。そういわれてみると、読者もたしかに蝶を見たように思えてきて、詩は終わってもイメージはさらにひろがってゆくのです。

「ある日」は始発駅から乗った電車のことが書かれ、電車が主役であることが特徴です。終りの連は

電車はどこへゆきたかったのだろう

まばらに坐った人は動かず

電車ばかりが生きて

冬をつきぬけそうに走った

夢のような風景の中へ

この詩も終わったところから、さらにイメージはひろがります。

「墓地通りで」も、すれ違った母子の会話から不思議な情景を描き出しています。

山中さんにとって、人間も物も同じ、この地上にあるもの、触れ合うものすべてが、山中さんに語りかける存在である、ということなのでしょう。「淋しい時や悲しい時に、逃げ込んでいける場所」と「あとがき」に書かれています。単なる逃げ場ではない詩の世界をひろげられているところに、作品の楽しさ、深さがあります。

看護婦というお仕事から生まれた「五月に」、またお母さまのことが書かれた「燃えた家について」も、味わい深い作品です。

「野火」によせられた作品の一つ一つをいままたここに、まとめて拝見して、一層、作品のよさが思われました。

第一詩集『早春の土手』のご出版、おめでとう。心からおよろこびいたします。

昭和五十四年四月二十日

高田敏子

目次

小さな街・	14
ある日・	16
通り道・	18
風の日・	20
街で・	22
二十日大根・	24
早春の土手・	26
墓地通りで・	28
水栽培・	30
五月に・	32
キャンプにて・	34
むらさき愛育園にて・	37
物干し場・	40

子供・	42
青桐の下・	44
ママのものがたり・	46
つゆくさ・	48
燃えた家について・	50
小さな木・	53
夏の終り・	56
愛の詩(1)・	58
愛の詩(2)・	60
夜に・	62
夢・	64
はじめに・	5
あとがき・	67

早春の土手

小さな街

角を曲がるとバラの垣根があった

バラはやわらかい微笑のようなピンク色だった

そこは歯医者家で白いペンキの診療案内板にもバラがから
まって咲いていた

石段に少女が腰かけていた

少女は診察券を手を持ったまま

バラの花に頬を寄せて深く香りを吸いこんでいた

短いそのワンピースから長い脚がでていて

門の敷石にふれていた

私が通りかかると少女は一層深くバラの中に頬をうずめた

通りすぎてから

蝶のようにも思えてきた